

◆関西学院大学 国際学部 村田 陽菜

10日間のフィールドスタディ期間中に伊東様から頂いた課題は、2000年頃から在カナダ日系企業の経営現地化が進んだことによるメリット・デメリットについて、日本人駐在員とローカルCEOにインタビューし、双方の見解を比較するというものだった。私たちペアは、日系企業がオンタリオに進出し始めた頃からカナダの市場において大きなシェアを占めてきた、日系自動車会社に着目してリサーチを行った。計4社でのインタビューに加えて、移民セミナー・補習授業校の会議の見学など非常に貴重な経験をさせていただいた。

特に印象に残っている場面は、ある自動車会社の日本人駐在員の方がローカルCEOのサポート役という従来とは違う駐在員の役割について、やりがいを感じていると仰っていたことだ。自分のやりたい仕事を探している途中の私にとって、やりがいを感じながらお仕事をされている方の言葉にとっても励まされた。もっと広い視点で色々な職種や国・地域をリサーチして、自分もやりがいを感じられる環境や仕事を見つけよう、と一歩踏み出すことが出来た。

また、インタビューを通して、ビジネスにおけるサステナビリティの実現の難しさも学んだ。例えば、EV車生産の推進は環境にはプラスの影響を与えるが、SDGs達成という点では、顧客層が限られてくるため手に届かない人々が一定数出てしまう。一方、開発途上国を含めたすべての国の人たちの手に届く車を生産し続けると、環境にやさしいEV車の開発は遅れてしまう。この気づきのおかげで、持続可能性に関わらず何かの問題やその解決策について考えるとき、「本当にそれはサステナブルなのか?」「誰かの犠牲の上で成り立っていないか?」、常にそのような疑問を持って考えられるようになった。

また、今回のフィールドスタディは、自己理解という点でもとても意義のある時間だった。ペアワークのように、誰かと協働する上で自分にとって大切なことは「伝えること」であると学んだ。私の苦手な「主張すること」が徹底できず、些細な疑問や意見を流してしまった。その結果、ペアとのプレゼンテーション作成や方向性に齟齬が生まれたり、コミュニケーション不足が生じたりした。以上のように自分自身の弱みが強調されるような内容となってしまった。今後は、自ら協働して何かを成し遂げる機会にチャレンジして、自分の想いを伝えたり、考えをお互いにぶつけあえる環境を作ったりできるようなトレーニングをしていきたい。

最後に、2週間お世話になった伊東様へ。

大学生の間に、伊東様に出会い、様々な経験をさせていただけたことは自分自身の大きな財産となりました。様々なことに関する知識、経験、そして周りの人に対する優しさや温かさなど、伊東様の人間的な魅力にとっても感動し、沢山救われた2週間でした。そして同時に、私も伊東様のような対人関係を築けるような人になりたいと強く思いました。2週間というとても短い間でしたが、本当にお世話になりました。トロントに来て良かった、心の底からそう思います。もう一度伊東様にお会いできることを楽しみにしています。本当にありがとうございました。

## ◆関西学院大学 国際学部 長谷 瞳

### <商工会でのフィールドスタディで取り組んだこと>

フィールドスタディでは、トロント日本商工会を通し、カナダ展開している日系自動車業界に焦点を当て、人事の現地化問題と脱炭素化問題への取り組みにおいて、企業が抱えている課題と今後の展望について調査を行いました。具体的な取り組みとしては、学生2人が1組となり、対談を行う企業とその業界について背景調査を行い、対談では1人1~2つ質問し、得た情報から要点を整理摘出し、プレゼンテーションとレポートにまとめるという内容でした。

訪問した企業は、日本の自動車業界の中でも最大規模を誇るトヨタ、ホンダ、そしてヤマハモーターでした。対談はそれぞれのカナダ拠点におけるCEO(トヨタ様は人事の方)と日本人駐在員の取締役の方であり、非常に贅沢な機会を設けていただきました。日系企業の訪問以外にも、グローバル展開するカナダ発祥の法律事務所、FASKENの弁護士より、カナダ現地の法制度や先住民問題など、現在カナダで注目を浴びているテーマについて、ランチをしながら対談をすることもありました。

さらに、日系カナダ人弁護士による移民法セミナーや、トロント日本商工会が長年にわたって取り組んでいる土曜学校の理事会に傍聴出席する機会もあり、まさに多方面から視野を広げられる場面が多くありました。

### <フィールドスタディを通して学んだこと、印象に残っていること>

フィールドスタディでは、大学生として決して触れることがない領域に足を踏み入れ、貴重な経験をさせて頂きました。特に、ある業界について深掘りし、直接CEOと役員の方と対談する機会を頂けたことは、何よりも非日常的な出来事であったと振り返っています。

フィールドスタディを通して、質問内容は想定回答を踏まえた上で更なる予備質問を事前用意することや、事前調査と対談から得た莫大な情報量から取捨選択し、本当に必要とする内容を依拠に基づいて整理摘出すること、随時自分のチームメイトと意思疎通し、進捗確認と役割分担、そして大綱から逸れていないかなどを交互確認すること、などを実践から学びました。

全体を通して印象に残っているのは、英語が非母国語で、質問の際に途絶えることがあったり、的を得ていなかったり、ビジネスマナーも万全でなかったり、という4人の学生に対して、FASKEN 弁護士のローゼンヘック様、3企業のCEOと駐在員様が皆非常に寛容かつ熱心に情報提供をしてくださったということです。質問の仕方が下手だと自省したり、企業分析の際の英語の文章量に挫折していたり、最終レポートの方向性に途方に暮れていたたり、という際に、彼らとの対談場面を思い返し、成果を出そうという思いに切り替えることができました。

### <この学びを今後どう活かしていきたいか、つなげていきたいか>

この2週間で、自分自身の将来像をさらに具体化することができました。グローバル市民として、多角的な視点から物事を分析し、各地域に寄り添ったモノづくりやサービス提供を行いたいという思いが強まりました。現在、就職活動中ですが、フィールドスタディを通して、「グローバル」、「自己成長」、「公益的付加価値の創造」という自身の将来軸が更に固まりました。この2週間で見たもの、出会った人、経験した出来事を自身の邁進する糧にしたいと思います。

## <伊東様へのメッセージ>

伊東様へは、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私のロールモデルでもあります。貴重な対談やセミナーの場を設けて頂いただけでなく、穏やかなオフィス空間、金曜日午後ドーナツ、ナイアガラ滝の滝、ドリームキャッチャー、それも思い出深く、そして何よりも私たち4人を2週間に渡って温かく見守っていただき、本当にありがとうございました！伊藤さんの人生経験と長いキャリアの中で蓄積されたエピソードや知識、カナダと日本の架け橋として活躍されている姿は、非常に魅力的だと感じています。私も、伊東様のようなグローバル市民に近づけるよう、がんばります！またトロントを訪れる機会があれば、訪問させて頂きたいです。

## ◆関西学院大学 国際学部 谷村 弥紀

-企業の在り方及び文学解釈(テキスト論)における構造的類似、文学領域への問い-

### 1. はじめに

2023年2月6日~2月17日、トロント日本商工会にてフィールドスタディをさせていただきました。伊東義員専務理事からは、オンタリオ州における日系企業の活動の歴史的経緯や日加におけるビジネス文化の違い、駐在員及びその家族に対する商工会の支援体制などについて講義をいただき、FaskenのRosenhek弁護士、Honda CanadaのLeclerc社長・鳥屋原副社長、Yamaha Motor CanadaのBurnett社長・大塚副社長、Toyota CanadaのMugavero人事部長・高橋副社長からは、経営現地化の利点・欠点や労働環境の現代化、先住民文化の理解の必要性などについてお話を伺った。

拙手記においては、フィールドスタディを通して学んだことを自身の専修分野である文学の観点から捉え、企業の在り方と文学解釈における構造的類似の可能性や“みえなきもの”に焦点を当てた社会形成の重要性について論じたい。

### 2. 企業の在り方及び文学解釈(テキスト論)における構造的類似

企業の在り方と文学解釈は、構造的性質において似ていると感じる。文芸批評家テリー・イーグルトンは、著書『文学とは何か-現代批評理論への招待-』において、文学は、社会思想やテクノロジーといった時代背景と密接に関係し、個々の作品の持つ意味合いは、それを手に取った読者との関係において一瞬立ち上がるものであると論じている。

経営現地化は、カナダ人社長をトップに据えてコミュニケーションを円滑にし、従業員のモチベーションを向上させることで、販売力の強化を促進させる経営方法である。文学におけるテキスト論をこれに当てはめると、企業の在り方(作品)が、従業員(読者)にとってどのように受け止められるかを考えた故の取り組みであると捉えられるかもしれない。さらに、Honda Canadaでは、昨今のLGBTQや女性従業員の割合の増加に伴い、“Honda フィロソフィー”が込められた白いユニフォームの色の見直しを行わなければならない状況に立たされているという。

つまり、伝統的で権威的なものであったとしても、企業や文学作品は、いまこの時代背景に合った解釈に適応する必要があるといえるだろう。それらは、共に社会というテキストの中に存在しているという点において、似た構造を持つのかもしれない。

### 3. 文学領域への問い

文学は、一般的に“敗者の領域”であるといわれるが、その“敗者”とされる作品群は“勝者”であると考えられる。私は、文学を3年間学び、個々の作品は、上述のようにテキストの中に組み込まれ、時代性及び読者性が反映されていると同時に、過去の“名作”も踏まえて創造されてきたように感じる。

しかし、カナダではその“名作”の“領域”が日本とは些か異なる可能性がある。伊東氏によると、多文化社会を掲げるカナダでは、G11の古典の教科書において、シェイクスピア作品から先住民作品へと教材の転換が図られているという。この動きは、カナダが長年にわたり抱えてきた先住民問題への取り組みとして位置づけられ、彼らの文化を守ることを目的としているようだ。

文学という学問領域には、一般的に、日本文学、英米文学、フランス文学など、一見すると多様な学問領域が存在するが、その多様とはあくまでも社会及び時代に応じて“選定”された上での“多様”であるのかもしれない。

田村俊子が『女作者』にて、男性中心の文壇の外に置かれた“女流作家”の苦悩を描き、女であるという理由から“ではない文学”としてレッテルを貼る当時の文壇を批判したといわれているように、私たちが現在学んでいる文学の領域がどのような特質を持ったものであるかは問うていく必要があると考えた。私たちは、何を考え、何を考えていないのか。個々の文学作品を学ぶことに加え、“土台そのもの”について考察を深めることも重要であるのではないだろうか。

### 4. おわりに

今回、トロント日本商工会の伊東氏のご指導の下、4社の企業の方々からカナダにおけるビジネス文化についてお話を拝聴し、大変有意義な経験をさせていただいた。日系企業を“縁の下の力持ち”として支え、日本人駐在員及びその家族にいかにも居心地の良い環境を築いていただけるかと日々奮闘される伊東氏の姿には心を打たれ、社会に貢献することの重みと喜びを感じた。

伊東氏によると、カナダは、全ての人々がありのままにいられる社会、すなわち、モザイクな社会を目指しているという。多文化社会カナダとは、あらゆる人々に“居場所”があり、各々が自分を大切にしながら輝くことのできる社会であろう。

私の目下の目標としては、文学を糸口に、より一層、思想哲学、政治、経済、歴史といった社会の仕組みについて学び、私たちは何を考え、何を考えていないのかについて問い続けることである。将来的には、全ての生命が自分らしくいられることのできる社会の形成に少しでも貢献させていただきたいと、今回のフィールドスタディを通して考えた。

◆関西学院大学 国際学部 渡邊 乃維

<取り組んだこと>FSCB のプログラムでは主にトロント現地にある日系自動車会社の訪問を行い、事前にペアと話し合い準備した質問をもとに日本人駐在員や現地の社長にインタビューし、そこで得た知見をレポートに書き下ろし、最終日には教授の前でプレゼンテーションを実施しました。

<学んだこと、印象に残っていること>

私は自動車から排出される Co2 を問題として提起し、それを軸にリサーチやインタビュー活動などを行ってきました。その中で学んだことはガスを全く排出しない EV 車を普及させるには充電スポットの設置や顧客の環境に対する意識などを変えていく必要があるため、時間と労力がかかるのだと感じました。

<どう活かすか>

私は将来駐在員として海外で勤務することが夢であるため、FSCB で得たビジネスの知識や問題解決能力、発案力などのスキルを今後さらに深め、将来の目標を具現化していきたいと思います。

<伊東さんへ>

この度は約 2 週間貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。商工会を通じて日系企業が現地で事業を拡大する上での具体的な取り組みや抱えている課題、それを乗り越えるために今実行していることについて深く知ることができました。ここで得た経験を必ず自身の将来に活かせるようこれからも頑張っていきます。改めてこの度は本当にありがとうございました。